

6. 子どもの感性をゆさぶる「科学遊び」 —現場の教師のとまどい— こまどり幼稚園(秋田県秋田市)

この「科学遊び」は課題遊びに属するもので、担任を中心に年間計画に基づき、意図的にまとまった科学遊びとして展開されます。教師の演示によって、興味深く不思議な事物や現象によって刺激された子ども達は、自分の好みに応じて主体的な遊びへと導かれます。その過程で教師は子どもの興味や好奇心をよく把握し、遊びがさらに広がるように援助します。最後に遊びのまとめと評価が行われます。

とまどい
教師の不安

科学的遊びに対する当初の教師の不安

- ①これまでの自由保育形態の中に突然このような形で聞いたことも無いような遊びを持ち込んで良いだろうか
- ②これを3歳児にやるのはとても無理なことである。
- ③新しい科学遊びの保育に当り、現場の教師は何をねらいとし、(科学的意味合いも含めて)どのようなやり方をしたら良いか戸惑うばかりである。

話し合い

これを真摯に受け止め、しかし、諦めず辛抱強く意見を交わしながら次のような形で理解が成立しました。

- ①今後自由保育と課題保育の組み合わせ方式とし、科学遊びは後者の課題保育の時間でやる。
- ②3歳児でも内容によっては充分やれるという事例が挙がったので大丈夫と思われる。
- ③この現場教師の不安を解決するために委員によって指導の手引きを作成する。各月の終わりに翌月分の題材について、この手引きを用いた解説や必要な講習会をやるから大丈夫。

科学遊びはあくまでも自然に対する興味を高め、そして不思議さ、おもしろさ等の感性を育てるのが目的であって、科学の知識が目的ではない。思考活動も理論的ではなく試行錯誤の過程こそ意味がある。ということで、理解が成立したのです。

勇気ある実践
研究保育

さて、理解は成立したものの、いざ実施となるとなかなかふん切りがつかず1ヶ月位経過したその時です。当時4歳児の担任だったT教師が「とにかくやってみないことには先に進まないから、私がやってみます」と言って、「磁石遊び」の題材で研究保育をやってくれたのです。

科学への興味

子ども達は目を輝かし、磁石の不思議なはたらきに驚き、歓声をあげながら思い思いの試みに熱中しました。

子ども達の感性に及ぼすすばらしい効果に担任のT教師自身こんなこと初めてと驚くばかりでした。



教師の成長

この貴重な勇気ある実践によって、科学遊びが明るい展望のもとに、本格的な研究実践に入り、回を重ねるごとに教師自身の科学的教養も高まり、科学への興味を増しつつ現在に至っています。これまで園長中心の委員会が立案していた年間計画を、教務主任を中心に現場で立案するようになり、現場の成長が示されました。

科学遊びの年間計画

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
年少		うさぎやちゃぼ	この音なあに	風ぐるま		さわってかいで	箱の中なあに	磁石遊び	鏡遊び		万華鏡	
年中		くるくるリボン	輪ゴム	氷作り シャボン玉		磁石遊び	こまあそび	木の実遊び	音遊び		氷と水 木の芽	
年長		鏡遊び	シャボン玉	川遊び *(水てっぽう)		ゴム風船	むしめがね *(色水遊び)	静電気 *(やしほべえ)	糸電話		電気遊び	

ポイント

「科学遊び」を日常の実践に取り入れようとしたとき、現場の先生方には様々な不安がありましたが、その不安を一つひとつ取り除いて、先生方自身が明るい展望を持って科学遊びに取り組めるようになってきました。先生方を変えたきっかけは、科学遊びに熱中する子どもたちの姿でした。